



ヘティスは宿舎で蓮也と話した。

ヘティス

「サトゥルヌスを倒すための条件ってあるの？」

蓮也

「奴を倒したという記録はないが、封印をしたという記録はある」

ヘティス

「それがこの前話してた蒼き魔術師による魔法封印ね」

蓮也

「ああ。それともう一人いる」

ヘティス

「え、そうなの？」

蓮也

「俺と同じ名前の“蓮也”というロータジアの始祖王がいて、その初代蓮也王と言われる存在がサトゥルヌス封印に成功している」

ヘティス

「じゃ、蓮也は蓮也二世なの？」

蓮也

「そういうことになるな」

「蒼き魔術師たちは五行英雄と言って、その英雄五人と配下・軍団を率いてサトゥルヌスを封印した。しかし、初代蓮也はサトゥルヌスをほぼ一人で封印した。しかも、蒼き魔術師よりも数段上の星魔法による封印だ」

ヘティス

「てことは、スゴいと言われた蒼き魔術師よりも更にスゴいのが初代蓮也ってわけね」

蓮也

「単純に言うとなんかそういうことになる」

ヘティス

「星魔法って何？」

蓮也

「レジェンドクラス（伝説級）より上のメシアクラス（救世主級）のみが使える究極魔法だ。それを更に爆発的に使ことで超新星魔法が発動する」

ヘティス

（ネコ師匠の超新星結界がそのレベルなのかな？）

「蓮也はそれを使えるの？」

蓮也

「残念ながらまだ無理だ。しかし、伝説では、初代蓮也は、七人の神聖王、七神聖王の力によって7つのチャクラを最高レベルにまで解放することで可能になったと言う」

ヘティス

「じゃ、その七神聖王を探すってわけね」

蓮也

「そうだ」



「それともう一つは三種の神器だ。初代蓮也が持って戦ったと言う聖剣・聖鎧・聖盾がある。この聖剣・聖鎧は俺が持っている。しかし、聖盾が消えたと言われている。歴史書では書かれていた」

蓮也は王国時代、王立図書館で最初の頃は魔法書・兵法書を中心に読んでいたが、それらを調べていくうちに歴史書も読んでいた。それを思い出しながら話している。

ヘティス

「なんで消えちゃったの？」

蓮也

「そこは書いてあったかもしれないが記憶にない」

ヘティス

「そうだ、私の住んでいた時代は、アトランティス大陸の遺跡の地下からたくさんの書物が出て来たの。多分、魔法がかけられていたから全然水にも濡れず風化もしてなくて。そのデータがたくさんあるから調べてみるわ」

ヘティスはスマートグラスをかけて、ロータジア史を調べだす。

ヘティス

「えーと、初代蓮也王の聖盾はと・・・」

「イージスの盾って言うんだ」

蓮也

「ああ」

伝説では、初代蓮也王は、そのイージスの盾を掲げ、その神聖力によってサトゥルヌスの魔力を弱めたとされている。

ヘティス

「ふーん、じゃあ、イージスの盾は必須よね～」

「ちょっと～、初代蓮也王は、聖盾を誰かにあげちゃったって書かれているわ！」

「そんな大切なものあげちゃってどうすんのよ～!？」

蓮也

「・・・ああ、思い出した、その渡したという対象は」

ヘティス

「・・・光の彼方からやって来た緑の目の少女、通称・グリーンアイズ」

「これって・・・」

蓮也

「かもしれないな」

ヘティス

（これは過去に既に織り込まれた歴史だから行くべきだわ・・・。クエスト発生ってところね）

「私、初代蓮也に会って、その盾を貰い受けて来ようと思うの。多分、これは私の使命だわ」

蓮也

「わかった、なら俺も行こう。お前一人では心配だ」



ヘティス

「え？私のことを心配してくれるの？」

蓮也

「お前一人の力では、ちゃんと盾を取ってこれるかどうかが心配だろ？」

ヘティス

「ちょっと・・・何よ、ソレ！私よりも盾の方が気がかりなわけ！？」

「・・・取り合えず、今回は私単独で行くわ。人数が増えると時空の歪みが強くなる可能性があるから」

蓮也

「そうか」

ヘティス

「一応、今の時空座標をセーブしておくけど、その初代蓮也の時代はかなり遠いから、ちょっと戻る時にずれるかも。誤差は多分二日・三日の範囲だから、少し待ってて」

蓮也

「わかった。その間、プロキオンたちを鍛え上げておくか」

「それと、これを渡しておく」

ヘティス

「何これ？」

それは蓮を象（かたど）ったフィビュラ（ブローチ）であった。

蓮也

「これはロータジアの王族の中でも選ばれた者しか持たない聖なるフィビュラだ。これを胸につけておけば面会できるだろう」

ヘティス

「そっか、いきなり私が行っても、どこの誰だかわかんないだろうし、それだと相手にされなさそうね。これならいいかも」

蓮也

「初代蓮也は名君だとされている。だから、お前を悪いようにはしないと思うが」

「ちゃんと戻ってこいよ、ヘティス」

ヘティス

「・・・うん」

早速、ヘティスはフィビュラを左胸の位置につけた。

そして、ヘティスは村外れに出てタイムマシンを呼び出し、初代蓮也王の時代へとタイムスリップを開始した。

時空間を移動している間、蓮也からもらった胸の聖なるフィビュラに手を当てていた。そうすると、時空を超えて蓮也とつながっている感じがした。

ヘティス

（胸が暖かい・・・）

時空間移動が終了した。

外を眺めると驚きの光景があった。

山々の遠くを見ると、城が空中を浮遊しているのである。



ヘティス

「なにこれ、浮遊城・・・!？」

「まるでアニメ映画の世界ね・・・」

「時空座標はそこまでずれてないと思うから、多分あれが初代蓮也の居城ね」

「とりあえず、警戒感を与えないように、ここからは歩いていかない」と

ヘティスはタイムマシンから降りて歩き出した。

ヘティス

「とても綺麗でいい場所ね～、歩いてて気持ちがいい」

と思ったら、ドラゴンが人間の臭いを嗅ぎつけてやってくる。

ヘティス

「え～！この時代にもいるのお？そして、来て早々、また、これなのお～!？」

「・・・プロテクション！」

(に、逃げなきゃ・・・)

するとヘティスの前に身軽な皮鎧にマントを纏った拳士が現れた。

「神速拳・無双十連！」

目にも留まらぬ速度でドラゴンの腹部に拳が撃ち込まれる。ドラゴンはその場に倒れ伏した。

ヘティス

(素手でドラゴンをやっつけちゃった・・・)

拳士

「おい、女性が一人で危ないじゃないか」

「私はロータジアの神速拳士・李統風(りとうふう)だ」

背後を見ると配下を何名か連れて馬で移動している途中であった。

ヘティス

「あの～、私、ヘティスって言います」

「あの城の王様に会いたいの」

李統風

「あそこに座すお方は王ではなく神聖不可侵なる皇帝陛下・此花蓮也様だ。会いたいと気軽に言うが、お前が気軽に会えるようなお方ではない」

ヘティス

(あ、やっぱり初代蓮也の城なのね！私って超運いい！)

李統風がヘティスの胸にあるフィビュラを見ると様子が変わった。



李統風

「そのフィビュラは・・・」

「・・・大変失礼しました。ヘティス様は陛下にどのようなご用件なのでしょうか？」

ヘティス

(よかった・・・、このフィビュラはこの時代でも通用するのね)

「・・・それは、秘密よ。直接、皇帝陛下にしか言えないような内容なの！」

(・・・こんな感じでどうかしらw)

李統風

「・・・わかりました。ご案内しましょう。城まで護衛させていただきます」

ヘティス

「統風さん、ありがとw」

プルプルプル

ヘティスの持っているスマートグラスが反応した。

ヘティス

(あれ？なんだろう？)

ヘティスがスマートグラスをかけると、

「キュリアス・モロー ≡ 李統風 : 輪廻率 97%」

と出ている。

キュリアス・モローとは、蓮也直属の諜報部隊長である。

ヘティス

(モローさんって、この前、窓から入って来た忍者みたいな人よね？あの人のが前世が李統風さんなんだ)

(・・・てことは、蓮也の前世は初代蓮也王なのお？まあ、この蓮奈からもらった輪廻転生分析ソフトが、どこまで信憑性があるかわかんないし、初代蓮也王に会ってみたいとわかんないわ)

城の前まで来るといくつもの大きな石版があった。李統風はヘティスに、その上に乗るよりに言った。李統風や部下たちも、その石版の上に乗った。

李統風

「・・・オーム シューニャ スヴァーハー」

李統風が、そう唱えると、石版が虹色に輝きだし空中に浮かび出した。

ヘティス

(な、なにこれ・・・。これも何かの魔法が石版に付与されているのお？)

しばらくすると浮遊している城の陸地へと運ばれた。



ヘティスは石版から降りて門を通り、応接室に案内された。

李統風

「しばらくお待ちください」

ヘティス

「・・・あ、はい」

応接室はとても広く不思議な空間であった。水が大理石の壁を伝い、重力とは反対に下から上に流れており、高い天井には水が張り巡らされている。そこに観賞用の色とりどり魚が泳いでおり、色鮮やかな花や植物が散りばめられている。そして、光魔法による照明が水の奥にあるため、七色の光が幻想的に揺らめいている。

ヘティス

（何、この部屋・・・。さっきの城と言い、変な石版と言い、物理法則を完全に無視しているんだけど）

（・・・けど、とても幻想的で綺麗ね。これは初代蓮也王の趣味かしら？）

しばらくすると、面会の許可が出て、皇帝の間へと案内される。ヘティスはいよいよ初代蓮也王と対面することになるのであった。ロータジア史上最強とも言える初代蓮也王とはどのような人物なのだろうか。そして、ヘティスは初代蓮也王からイージスの盾を貰い受けることができるのであろうか。

【解説】

<蒼き魔術師との比較>

魔力の基礎的な力や魔法の多彩さなどは蒼き魔術師の方が初代蓮也王よりも上である。剣技はインテグリストである初代蓮也王の方が上である。

初代蓮也王は七神聖王によって高次元クンダリニー覚醒を行っており、蒼き魔術師は、それを行っていないところで封印のレベルの違いが出ていると歴史家には思われている。しかし、そうではない。その内容は、ロータジア史の謎の一つであり、今後、また述べていくこととする。

<帝国・皇帝>

ロータジアの初期は、帝国・皇帝を名乗っていたようである。支配領土や軍事力もそれなりに大きかったようだが、時代を降るにつれて小さくなり、地方の一王国にとどまることとなったようである。

<輪廻転生分析ソフト>

『ミラクルHT物語』でヘティスの子供の蓮奈が未来からやってきて、輪廻転生分析ソフトをヘティスに渡す。ここでは、このソフトのバージョン1.0を使用している。

<https://www.alphapolis.co.jp/novel/548869271/757415627/episode/4548882>

画像データや音声データが蓄積され、そのいくつかのデータの中で、輪廻転生の相関関係が高い場合、スマートグラスの中にインストールされたこのソフトが反応する。



ちなみに、画像データは、ヘティスのつけているスマートチョーカー内蔵カメラによって行われる。同時に音声データも蓄積される。